



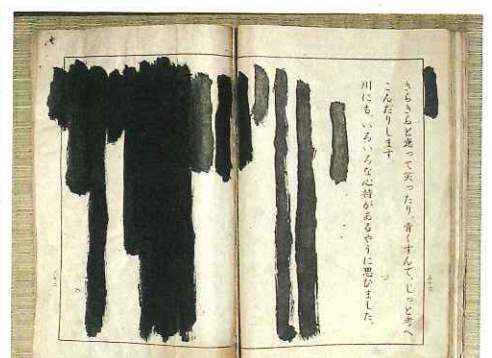
寺子屋手習い本

各地の寺子屋で作られており、ここにあるのは本村で使われていたもので、此の地域全体の集落の名前が書かれている。



明治2年教科書

明治2年新政府が発足したばかりの頃、漢字と洋数字の書き方などを始め新しい教育の手習いの本である。



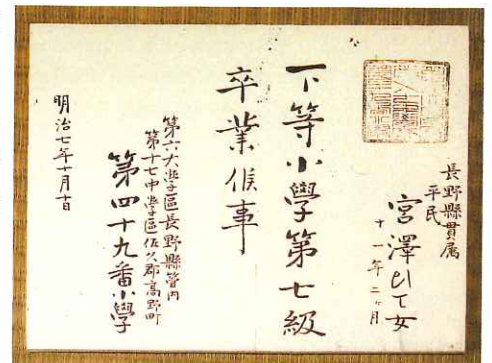
黒塗り教科書

戦争が終わって紙不足で新教科書が出来ず、天皇が神様で無くなったので旧教科書に載っていた神話は消されて使われた。

## 一学校のはじめ一

江戸時代末期には現小海町の中には、10カ所位の寺子屋があり、上記の習字の初歩から論語、孟子など中国の古典から『庭訓往来一ていきんおうらい』などの職業に関する教科書もあり、寺子屋によって異なるだろうが、これらの手本が数多くみられるのは、広い範囲に渡ってこれらの手本を学んで居た事だろう。特に多く残っている本は『日本外史』でこれは寺子屋ばかりでなく個人でも読まれていた本だろう。

明治になって学校となってから最初の卒業証書が見られるが、卒業の月が明治7年4月、10月、12月など様々で開校当初は混乱もあったようだ。



## 一スケートの町 小海一

スケートと小海町の関係は、冬の厳しい寒さと風土にあり、本州一早く氷結する松原湖でのスケートは、明治時代に始まり昭和、特に戦後盛んになる。

学校での冬の体育はスケートの授業が毎日のように行われ、マイナス10度以下の厳しい自然の中で子供たちは心身を鍛え、世界に羽ばたく有名選手を何人も輩出した。

松原湖にスケートが入ったのは、明治36年松原分教場の教師 伊藤乙弥が持ち込んだ1台のゲロ（下駄スケート）を子供たちが交代で履いて滑ったのが始まりである。同42年には諏訪でスケートを習った教師 岩井伝重が北牧小学校に赴任してスケートを教え注目された。

その後、大正6年には第1回松原湖スケート大会が行われ、猪名湖、大月湖、松原湖高原スケートセンターと競技会場を替えつつ、現在もこの名称で毎年スケート大会が行われている。

この歴史のあるスケート小海に育った子供たちは、昭和40年頃県ジュニア大会で好成績を収め一躍注目された。その伝統を受け継ぎ、今シーズンも寒さと強風の中練習に励んでいる。



第1回佐久スケート連盟



賑わいをみせる猪名湖（松原湖）



パイピングスケート場育ちの豆スケーター